コロナ以降の葬式について思うこと

私のお寺のある地域はコロナ前は親戚の方などが参列をして見送ってくださるのが多かったわけだがコロナ以降も一部のご遺族の方以外はそのままのコロナ前の葬儀スタイルをしていただいてる。都市部はコロナ前から家族葬にする方が多いと聞いていた。

この家族葬の是非については、多くの先輩僧侶の方によると家族葬はするべきではないといった意見や亡くなったときはみなさんで見送って欲しいとおっしゃっていますが、私は必ずしもそうは思わないのです。

なぜなら、昔と違ってもう平均寿命が異常に伸びて男女の平均はもう８６歳であり戦後すぐまでは６０歳にも満たなかったのである。これだけ平均寿命が延びれば死にたくても死ねない社会が来てるのではないかと宗教学者の島田裕巳氏は述べられている。島田裕巳氏は寿命が短い時代は死というものがすぐそこにあり「仏教は、生老病死を苦としてとらえるところに特徴があるこのなかの生とは、生まれることを意味する。人は生まれたときから、苦の世界に投げ込まれるというわけだ。それが仏教の教えの中心であり、その苦の世界から逃れるためには、極楽浄土に生まれ変わるしかなかった。」と述べているが当時はいつまで生きれるかわからなかったゆえに現在みたいに科学が全くなかったために信仰や宗教を大切にしていたと思われる。

しかし、現在は死がスケジュールに組み込まれた人生であると同氏はいっている。現在は医療や科学が発達しさらにＡＩが台頭し人に代わって一部のことをしてもらえるのが当たり前になっている。

「現世は豊かで、いくらでも幸福をもたらしてくれる。だからこそ、長く生きられるのだ。少なくとも、十分に生きることができず人生が途中で失われてしまうとにはならない。それはむしろ稀なことなのである。となると、来世に期待をかけ、現世において信仰生活をまっとうしようということはならなくなる。そうなれば、宗教への期待は薄れる。いつまでも人生は続き、かえってその長さに耐えられなくなる。高齢になって死を求める人たちが現れるのも、来世に生まれ変わることを求めてのことではない。」とも述べられているが若い人が、宗教に期待をしているのかどうか全くわからないと感じるが我々僧侶が若者側に寄りそっていく必要があると考えている。例えば、自坊で週に一度程度でいいから若者や門徒さんの悩みにこたえる時間や気軽に相談をしてもらえるようにしていくべきだといいと思う。現代の人はお寺は観光で行くところと考えている人が多いと感じるゆえに、普通のお寺には立ち寄りにくいといった意見が多いとのことだ。それであるなら気軽に立ち寄れる場所作りが必要である。

私自身は家族葬に賛成か反対かと問われば実はどちらでもないとの立場である。なぜなら今の時代は物価高で食費の切りつめや子供のいる家庭は習い事を減らしたりお小遣いを減らしたり大変なのである。そんな時代に通常通りに、葬式をしてほしいといっても到底納得されないと感じる。様々な考えはあると思うが葬儀は個人の死を悼み、死後安らかに眠れるように願う場であり、もう一つは遺族をはじめ遺された人たちが故人の死を受け入れ、気持ちを整理し故人との別れを実感する場所だと思うので遺族が通常の葬儀をする必要があるかといえば必ずしもそうとは言えないと感じるのが私自身の思うところである。とはいえ、何

もお金に困っていない人や親族などが家族葬は絶対に反対なら最低限の親族を招いて実施すればいいと思うし今の時代は柔軟性をもたせても問題ないと考えているが皆さんのご意見をきかせていただけたら幸いです。

参考文献　島田裕巳著　「捨てられる宗教」